

文 化

東日本大震災を契機に、宗教学者が僧侶や牧師ら宗教者を支援し、連携する動きが広がっている。被災者の深い悲しみを癒やすプロの養成や手法の研究、ネットワークの構築が、宗派や学問の垣根を越えて進む。交流は理論から実践へと宗教学の姿勢をも変えつつある。

大学に専門講座

死期の迫った病人や、大災害・事故の犠牲者の遺族。自他の死に直面して苦しむ人の心に寄り添い、ケアする宗教者を育てる専門講座が今月、東北大学に誕生した。「実践宗教学寄付講座」。3年間限定とはいえ、国立大学では初の試みだ。学部生・大学院生には過去の思想・哲学を学び自身の死生観を育む「臨床死生学」などの講義と実習、僧侶や神官、神父ら宗教者には、より実践に即した講習会を開く。日本では心のケアは主

震災を機に理論から実践へ



宮城県南三陸町では犠牲者の四十九日に僧侶と牧師がともに鎮魂の祈りをささげた(2011年4月28日)

宗教学者、僧・牧師らと連携

る。海の中に目が見えるという噂も流れた。「それらを気のせい、錯覚と言っただけでは鎮まらないのが人間の心。死がすぐ癒やす専門家のネットワーク

に医師や心理療法士に任せ、宗教者が関わることは少ない。だが、キリスト教圏では「チャペル」と呼ばれる専門の聖職者がホスピスなどで働く。その事例も参考に、特定の宗派によらない「臨床宗教師」と名付けたプロの養成を目指す。同講座を提案した鈴木岩月教授(宗教学民俗学)は「死後や靈魂の話がで

いう価値観を語る宗教者にしか担えない役割はある」(鈴木教授)。「宗教的ケアとは、話を聞いたり、瞑想させたりして、傷ついた人の自我の機能の回復を助けること」と定義するのは、高野山大学の井上ウィマラ准教授(スピリチュアルケア学)だ。米同時多発テロやスマトラ島沖大津波などをきっかけに、英米では研究が盛んになった。日本でも意識を高めた。井上准教授は話す。6月にも米国から研究者を仙台市に招き、ワークショップを開く。他にもこの1年間は、学界が宗教者と協力し、活動を支援する姿が目立っていた。1995年の阪神大震災時には、同年に起きたオウム真理教事件の

被災ケアの専門家養成 「臨床の知」探る

余波で思うように社会に貢献できなかった。その反省を踏まえ、3月11日直後から動き出した。東京大学の島田進教授(宗教学)は全国の宗教団体・組織に呼びかけて「宗教学者災害支援連絡会」

を実現させた。大阪大学の稲場圭信准教授(宗教学)は「宗教学者災害支援ネットワーク」を結成した。いずれも被災地の宗教者と連携して救援に役立つ情報を交換・発信してきた。

注目し、再興の重要性を訴える。「民俗行事は本来、地域を一つに束ねる社会資本であり、その基盤には伝統的な民間信仰がある。その価値を見直し、精神的な意義を地元の人に伝えていくのが宗教学者の役割」と考える。

京都大学こころの未来研究センターの鎌田東二教授(宗教学)は昨年4月、「東日本大震災プロジェクト」を立ち上げた。宗教学者と各宗派からの代表に社会心理学者や民俗学者らも交え、震災後の人間関係や地域の姿を数年かけて検討する。今年の7月に3回目の研究発表会を開く。

民俗行事に注目

震災を機に「宗教学は『アクションリサーチ』(実践的研究)へと変わった」。今後は理論だけでなく、具体的な問題解決の場に出ていく「臨床の知」になるとみる。見過ごされてきた研究テーマに光が当たる可能性もある。例えば、鎌田教授は被災地の民俗行事に

類学に近いスタンスだった。今後は理論だけでなく、具体的な問題解決の場に出ていく「臨床の知」になるとみる。見過ごされてきた研究テーマに光が当たる可能性もある。例えば、鎌田教授は被災地の民俗行事に

死つなぎ留め 宗教の始まり



臨済宗僧侶・作家の玄侑宗久氏の話 死が我々の全く知らない世界に行くことだという考え

は、人を少女にする。宗教の始まりは、死を生者の世界の一部につなぎ留めること、あるいは死者の世界への入り口を作ることであったのではないかと。我々の生きる世界はさまざまな関係性の上に成り立っている。死者との関係も重要で、そこに居ない人々も自分の日常を支

えているという感覚は大切だ。普段の何気ない思いや出来事にも歴史が沁みだし、我々も過去から連綿と続く時間の一部分なのだと思える。ほぼすべての宗教が弔いの儀式を生み出したのは、悲しむ場所と時間を集約するためだろう。それによって人は日常に還ることが出来る。だが、被災地の海はいまだに多くの人々をのみこんだまま。お葬式を出してもまだ気持ちの整理がつかず、死亡届を出せないという遺族も多い。その現実とどう向き合いかが宗教者に問われている。

(文化部 白木緑、干場 達矢)